

民具名称のなりたち

—奥会津只見の事例から—

佐々木 長生

はじめに

民具研究の国際化における一つの大きな壁が、比較研究するうえでその指標となる「標準名」の設定であることは否定できない。民具の標準名設定など不可能であると、研究者は口を揃えた如く語るのが現状であるといえよう。

しかし、この問題を避けての民具研究は、国際化はもとより国内ですら壁に打ち当たっているのが現状である。神奈川大学国際常民文化研究機構共同研究「民具の名称に関する基礎的研究」班（研究代表 神野善治）は、この問題の打破を目標として研究活動を行うものと、私個人は認識している。研究班では、福島県南会津郡只見町の民具を共同研究員一同が見学し、その整理に当たって来られた町民たちと懇談しながら、民具の名称をはじめ自然との関わりなど、只見町内の自然環境を見聞しながら研究活動の第一歩を踏みだした。

私は地元の研究員である立場から、只見の自然と民具について概説的に紹介し、その名称のなりたちについて述べてきた。そして、研究班では只見の民具の名称について、一覧表化する作業を行い、次に沖縄県の民具については上江洲均研究員、鹿児島県の民具については川野和昭研究員が、それぞれ一覧表に民具名称を記載していくという、息の長い作業を行ってきている。

その結果、会津という山間の地の民具と、沖縄・鹿児島という海浜の地の民具ではその存在状況も違い、照合することも困難な民具もある。一方、北と南という地域差、民具の形態・材質・使用方法など著しい差があることも、一つ一つの民具の照合という地道な作業によって明らかになりつつある。頭の中では当たり前と言えるが、会津・沖縄・鹿児島という一つの表に民具の名称を記載していくことにより、民具名称のなりたちや存在状況なども徐々に見えてくるように、私は感じている。こうした潜在的な意識を顕在化することが、まず研究の一步と私は考えている。

これまで私自身が只見の民具の調査・研究に携わってきたことと、共同研究員一同が見学していること、『図説会津只見の民具』という刊行物があることにより、研究員が共通して対象となる民具を把握できることなどから、まず私が只見の民具を一例に、民具名称のなりたちについて述べるのが、研究活動の小さな一歩であると思ひ、「民具の標準名」設定に関し、民具名称のなりたちについて試論を述べたい。

1 只見の自然と民具

只見町は福島県南西部に位置し、新潟県に隣接している。その面積は747km²という広大で東京都23区の1.5倍に相当し、大半がブナをはじめとする落葉広葉樹の山林である。また「丈余りの雪」と呼ばれる積雪が3mにも及ぶのが国を代表する豪雪地帯である。その雪どけ水はブナ林に保水され、徐々に麓の村々へと注がれる。多くの川が合流して、伊南川そして只見町内で只見川と合流して日本海へと流れている（写真1）。只見町は、山・雪・川という自然に人々が生活を営んできている。

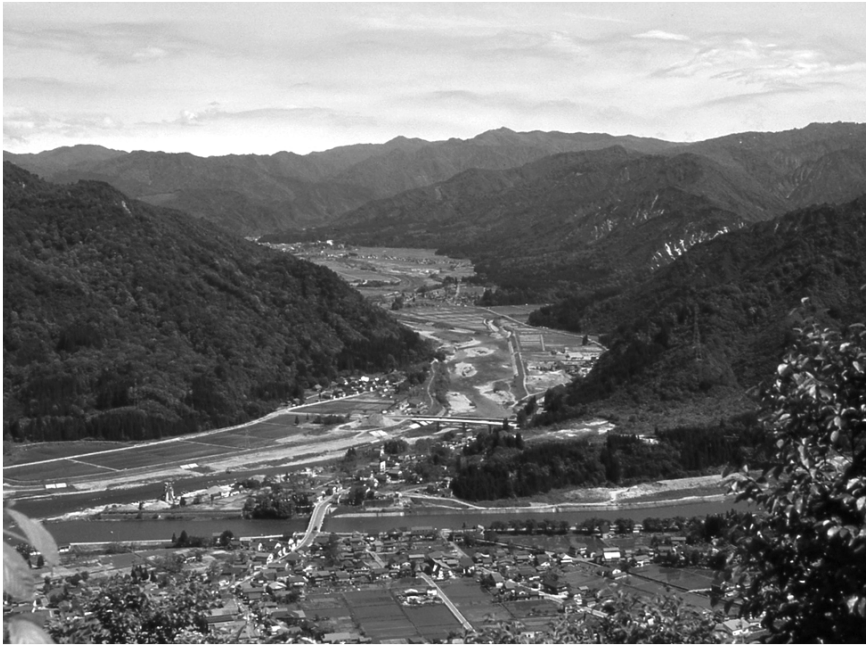


写真1 只見町の集落の様子（只見川と伊南川が合流する景色）

すなわち、この自然に人々は働きかけ（生産）、消費するという生活を維持してきた。只見の民俗は、山・雪・川という自然と人との織りなす生活で、その自然の恵みを受けての生活である。只見の民具は、只見の人々と自然との結晶ともいえる（図1）。

只見町には、町民自らが収集・整理された民具が約9,000点ほど保管されている。只見町民による民具の整理、すなわち民具の名称・材質・製作方法・使用

方法・写真撮影・計測などを資料カードに記載している。カード作成にあたっては、まず民俗事象の項目、例えば稲作であればその生産行程を記述し、そこにどのような民具が使用されるかを記載している。その記述には、民具の製作および使用体験のある人自らの記録であるので、資料的価値が極めて高い。また、製作方法、使用方法なども簡単ではあるが、スケッチなどで図示されている。只見での体験であるため、他地方の資料が混在しない点は、注目すべきであろう。只見の民具は、このような方法で整理されたもので、いつしか「只見方式」と呼ばれるようになった。

只見町教育委員会では、このような形で整理された民具を、『図説会津只見の民具』として編集刊行した（平成4年）。次いで、民具整理にあたられた町民たちは、当時行われていた『只見町史』民俗編の調査にも積極的に協力され、只見の調査と並行し民具の問答を多く記録するように努められた。そのような町民参加による『只見町史』民俗編は、民俗学界からも高い評価を得ている（平成5年刊行）。

只見町ではこれらの民具の中から、生産・生業に関する民具を中心に、国指定重要有形民俗文化財の指定保存を目的に、再度整理・調査を行う。文化庁の指導により新たな整理カードを作成し、町民自ら作成したカードをもとに再調査を行う。この作業も町民によるもので、横山哲夫氏・馬場惇氏・渡部幸生氏の3名による整理である。また民具の実測図は、星孝子氏による詳細な図も添付されている。星氏は、神奈川大学常民文化研究講座の民具実測の研究講座より、民具実測の技術を修得している。まさに、町民による民具の国指定である。只見方式による民具整理が、一段とグレードアップされたことで、平成15年3月には町民たちの努力の甲斐もあり、国の重要有形民俗文化財「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」（2,333点）として指定された。その内容は、只見町教育委員会により『会津只見の生産用具と仕事着コレクション』として平成17年に刊行されている（写真2～5）。

この指定文化財の中にも含まれているものに、只見町内には大工・屋根葺・木地挽^{もとやま}・元山・狩人などその職祖神の由来等を記載した職人巻物を所持し、現在もその民俗が続いている。巻物を所持しないと一人前でないという慣習が今日にも見られる。また、結婚式はじめ儀礼時の作法を記載した小笠原流の巻物も多くある。これらは只見町の民俗を特色づけるもので、神奈川大学日本常民文化研究所では、職人巻物の民俗調査を行っている。その成果は、平成18年に『奥会津地方の職人巻物—書承と口承の交錯—』として刊行している。また、神奈川大学常民参考室で特別展「奥会津の職人巻物」（共催：只見町・

福島県立博物館)を開催し、多くの人々の眼に只見の民俗を印象づけることができた。

また神奈川大学の佐野賢治教授のゼミでは、只見町大倉地区の学術民俗調査を大学院生を中心にして行い、学術調査報告書『大倉の民俗』を平成20年に刊行している。只見町と神奈川大学との交流は、民具を介して年を経るごとに深まっていった。5年間にわたる神奈川大学21世紀COEプログラムの研究作業では、非文字資料としての民具研究という事業で、只見の



図1 会津只見の生産用具（自然と民具の模式図、人と山・川・雪）

民具研究が大きな対象となった。その成果は、インターネットによるデジタルミュージアム構想のもと、「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」の内容をカードごと閲覧できるよう只見町と神奈川大学の連携のもと公開できるようになった。これにより只見の民具が世界に発信され、国際的に公開されている。中国の民具研究および整理作業において、只見の民具整理が模範となっているという情報もあり、大変喜ばしいことと思う。

このような状況下にある只見の民具は国際常民文化研究のうえで、一つの指標になり得るものと私は思っている。只見方式により整理された民具、特に名称（いわゆる地方名）には民具のなりたちを伝える多くの民俗が語り継がれてきている。私は、このような視点に立って、只見の民具を中心にそのなりたちについて、貞享元年（1684）の『会津農書』の農具と照合しながら、二、三の試みを行った（「民具の標準名設定の一試論—『会津農書』の農具の農具との照合を一例に一」『神奈川大学国際常民文化研究機構年報1』平成22年10月）。本稿では、拙稿を紹介する形で民具の標準名を設定目標をめざし、その指標となる二、三の方法を述べてみたい。なお詳細については、前掲拙稿を参照されたい。

2 民具名称のなりたち

民具名称を見た場合、大きく次のような指標をもとに名称化されているといえる。これは只見地方のみならず、全国的にも言える。私は前掲「民具の標準名設定の一試論」で、次の指標を提示した。

1) 形態に関わる名称



写真2 作業着コレクション



写真3 狩猟用具

- 2) 材質に関わる名称
- 3) 動作に関わる名称
- 4) 身体に関わる名称
- 5) 伝播に関わる名称
- 6) 信仰・俗信に関わる名称
- 7) 世相に関わる名称、その他

なお、これらの項目の複合による名称もある。また使用方法から発する音による名称もあつたり、作業能率から付いたと思われる名称もある。

民具名称のなりたちを概観すると、形態・材質に関わる名称に次い

で、動作に関わる名称が多い。特に、使用方法の動作から名称化する場合が多い。

- ① 移動行為。左右・上下へ、前・後へ、回す、押す、引くなど、人間の基本的な行為から運搬用具、加工用具などに多い。
- ② 振動行為。振る（震る）、揺する、あおるなどの行為から選別用具に多い。
- ③ 粉碎行為。搗く、突く、打つ、掘る、あける、はがすなどの行為から脱穀・調整用具、耕起用具などに多い。
- ④ 保存行為。溜める、漬ける、発酵・醸造など液体・固体等の保存、備蓄行為から食物加工用具や食生活用具などに多い。
- ⑤ 濾過行為。通す、漉す、浸透などの行為から選別用具に多い。これには水溶液と粒子の選別とに分類される。
- ⑥ 乾湿行為。物を乾燥させたり、湿らしたりする行為から衣食住、特に食生活用具に多い。
- ⑦ 切断・屈曲行為。切る、裂く、削る、折る、曲げるなどから生産加工用具に多い。
- ⑧ 結束・着用行為。つなぐ、束ねる、着用から衣類や装身具などに多い。
- ⑨ 冷暖・明暗行為。暖房・冷房、照明、遮光などの行為から冷暖房用具、照明・遮光用具に多い。
- ⑩ 煮沸用具。煮る、焼く、蒸す、いぶる、煎るなどから食生活用具に多い。
- ⑪ 伸縮行為。広げたり、伸ばしたり、狭めたり、絞ったり、圧縮などから生産用具や食物加工用具に多い。
- ⑫ その他、書く・描く、染める、編む、織る、防御、発声、消音などの行為から名称化されたものもある。

また、使用目的から名称化したものも少なくない。例えば、餅搗臼・糲摺臼・鱒鉤・肥出鉤などがあ
る。作業能率から付いたと見られる名称として、脱穀用具の千把（齒）扱・千本杵、選別用具の千石・
万石通などがある。

動作に関わる名称と複合して、民具を使用する身体の部位を冠して名称化される場合も多く見られる。主に被り物・履物・衣類など衣食住に関わるもので、大きく次のように分類することができる。

- ① 頭・首部。耳飾り・襟巻など。
- ② 肩・背部。背負梯子・背中当など。
- ③ 腹部・腰部。腹巻・腰籠など。
- ④ 手・腕部。手甲・手桶・腕貫など。

⑤ 脚・足部。^{きやはん}脚絆・^{ももひき}股引・^{あしなか}足半など。

身体部位からの名称を見た場合、全国に共通している呼称が存在するため、標準名設定の有効な指標となる。

以上、民具名称のなりたちについてその項目のみを提示したが、その具体的事例とその解説については、前掲「民具の標準名設定の一試論」を参照されたい。



写真4 農耕用具

3 民具名称のなりたち、二、三の事例

(1) カリアゲユッコギ

会津地方では労働時の下衣を、会津若松市を中心とする平坦部ではサルッパカとかサッパカマと呼んでいる。山間部の奥会津の南会津郡ではホソッパカマとかカリアゲユッコギと呼んでいる。サルッパカマについて文化4年(1807)の風俗帳などには、「猿袴」などと記述されている。履いた姿が猿に似ていたのか不明である。サルッパカマまたはカリアゲユッコギは、^{すね}脛部が細く股部が太い形の山袴である。そのため只見町や桧枝岐村ではホソッパカマ(細袴)の呼称もある。これは形態からの名称である。

ユッコギという名称は、長野県など深雪地方にもあり、「雪ごき」に由来するものか不明である。カリアゲは「刈り上げ」からか、脛部を細くしたもので「刈り上げる」そんな状況を示したものか、推測の域を脱しきれない。

また只見地方では、冬期間上衣にワタイレ(綿入)を着用する。その裾部が腰まわりにあるため、下衣も腰部まわりを幅広く大きく作る。これをブタユッコギとかダフユッコギと呼ぶ。ブタとかダフは広いとか太いという意味の呼称であるという。只見ではワタイレをオミンノコと呼んでいる。かつては麻布のワタイレで、綿や麻の繊維をとるときにできたかす(オグソ・苧ぐそ)を入れたものである。麻布は、一般にヌノと呼び、これをていねいな呼称で、「御布子」と呼ばれるようになったのか、興味ある名称である。

(2) ツルカンジキ

深雪の上を沈まないように輪状のものを着け歩行する用具をカンジキと呼ぶ。「標」と表記される。民具名称のなりたちを考える場合、有効な資料の一つである。形態からいうとコカンジキ(小標)・ワカンジキ(輪標)・マルカンジキ(丸標)・カメカンジキ(亀標)などの呼称がある。材質からはカナカンジキ(金標)、動作からはツルカンジキ(吊標)、製作方法とみられるものとして新潟県魚沼地方のスカリがある。また、湿田で使用する田下駄をカンジキに似ているところから、カンジキとかガンジキと呼ぶ地方もある。

「丈余りの雪」と呼ばれる只見をはじめ奥会津では、除雪対策として歩行のための雪道確保に、雪を取り除くことは不可能である。そのため踏み堅める方法がとられる。只見ではツルカンジキと呼ぶ楕円形の大きなカンジキを履いて雪を踏み堅める。ツルカンジキは、つま先の方に縄を付けて吊り上げる状態で使用する。そこから「吊るカンジキ」と呼ばれるようになったものか。新潟県ではスカリと呼ぶ。鈴木牧之の『北越雪譜』には、スカリを履いて雪踏みする光景が描かれている。スカリという名称は、



写真5 山樵用具

スカリすなわち編袋のように、カンジキの乗緒（足を載せる部分を網状に編んで作ったものか）の形態から生まれたものか不明である。

只見町田子倉には、ツルカンジキの名称の由来に八幡太郎義家の伝説がある。義家が大雪で一歩も進軍することができなくなった。その時一羽の鶴が木の枝をくわえてきて雪上に落とし、その上に止まった。それを見た義家は兵士たちに、木の枝を輪状に曲げ装着させ、進軍し勝利をおさめた。そこで「鶴かんじき」という伝説である。文化4年の大沼郡三島町大谷付近の風俗帳には、ツル

カンジキの簡単な絵があり、そこに「鶴」と記載されている。ツルカンジキは新潟県に接する只見地方のものは大きく（長さ約1m、幅約40cm）、雪の少なくなる地方では徐々に小さくなり、会津平坦部では見られない。

(3) テズラ

只見町と隣接する大沼郡金山町横田地区には、テヅラまたはミズヨケ（水除け）・ドロヨケ（泥除け）などと呼び、鋤の柄に板またはマタタビつるで編んだ板状の泥除け具をつけて、湿田の田起こしをする。この作業をタゴシラエ（田拵え）と呼んでおり、泥除け具をつけた鋤をタゴシラエグワとも呼ぶ。

このような泥除け具は、弥生時代の農耕遺跡からも出土している。力武卓二氏は泥除け具について、分布をはじめ形態など精力的に研究されている。主に、石川・新潟・山形・秋田県など日本海側に民俗事例として存在している。石川県ではテドリ、山形県庄内地方ではテンズラ、そして只見ではテズラである。その呼称に共通した語彙が見られる。天和2年（1682）著述とされる東海地方の農書『百姓伝記』では、「ていでい」とある。元禄10年（1697）著述の宮崎安貞の『農業全書』では「ねこ」とあり、その絵まで記載されている。これは製作方法すなわち「ねこ編」からの名称と思われる。

テイデイ・テドリ・テズラ・テンズラなどには、共通した語韻がある。テは「手」に通ずるものか不明である。石川県地方では、テドリの穴を蛇などが通り抜けると、田の水口が切れたり、不作になるといって、破損したときには跡形なくこわしたり、使用しない時は穴に藁などを詰めておくという俗信もある。只見地方ではこのような俗信は聞かれない。只見地方のテズラは、新潟県側より伝播したものとみられる。

(4) コウガイ

只見町など只見川流域の山間部には、コウガイとかコゲエなどと呼ぶ穂摘み具がある。長さ約10cmほどの木製の台の上に鉄製の刃を付けたもので、粟やキビなどの雑穀の収穫に用いるもので、カノと呼ばれる焼畑で主に使用されてきた。弥生時代の石包丁を連想させるもので、青森・岩手・秋田県などの古代遺跡からも同型のものが出土している。コウガイは新潟県の旧入広瀬村・旧下田村など只見町に接する地域での使用が確認されており、菅見のかぎりでは他地方では分布していない。只見地方では、昭和30年代まで使用されてきた。

コウガイという呼称の由来については、現在では不明である。コウガイは台に穴をあけて紐に指を通

して使用する。「手甲」とか「甲掛」と呼ぶものと同じ方法である。すなわち、「甲掛け」からか不明である。

結びにかえて

以上、只見の民具を例に民具名称のなりたちについて、私なりの考えを述べた。これは試みであり、多くの問題がある。只見町の古老を中心とした民具整理と、その成果による民具整理カードの資料的価値には、特に名称においては、民具の標準名設定について指標となる有効なものである。只見の民具は、その一部ではあるがインターネットによるデジタル情報として閲覧できるという利便性があり、国内はもとより国際的にも公開されている。こうした学術的環境のもとにある只見の民具は、その標準名設定の作業において一つの指標となり得るコレクションといえる。

現在、神奈川大学国際常民文化研究機構共同研究「民具の名称に関する基礎的研究」班では、このような民具名称の標準となる指標の構築に向けて共同研究員一同、一丸となって取り組んでいる。只見の民具の会津、そして沖縄、鹿児島、新潟と一覧表に各地の民具名称を照合するという地道な作業を行っている。この作業が全国的規模で展開されていくなかで、「民具の標準名」の形が見えてくると私は信じている。只見の民具が、その出発点なることを信じている。その民具の背景には只見町民の温かい声や協力があることを伝えたい。